

# 都市の狭小・未利用空間を生かす小規模建築の可能性 ーコーヒースタンドを通じた余白空間の再価値化に関する研究ー

指導教員 加茂 紀和子 教授

谷藤拓海

**1. 研究の背景** 現代の都市空間は、インフラ整備や都市再開発の過程によって、用途未定の余白空間が随所にみられるようになってきている。これらの空間は、使用困難な空間とされながらも、都市に柔軟性や多様性をもたらす可能性をもった、未完の空間資源ともいえる。また、画一的な商業施設や大型チェーン店舗が並ぶ都市空間に対して小さく、個性や地域性を感じられる空間が再評価されつつある。2010年代以降、コーヒーを専門的に提供する小規模な店舗形態であるコーヒースタンドが日本各地に広がり、従来の喫茶店やカフェとは異なる体験が注目されている。建築としてのスケールは小さいが、人々の交流・景観形成を促すなど、都市の中に新たな公共性を生み出す力を持ち、単純な消費行為を超えて、人と人、人と街をつなぐポテンシャルをもつと考える。

**2. 研究の概要と目的** 本研究では、既存のコーヒースタンド事例の設計意図・設計操作や空間構成を調査することで、コーヒースタンドによって人や街との関係性を生み出す手法を分析する。また、現状残されている都市の余白空間の調査を行う。それらの結果を活用し、都市の余白空間に新しい意味を与える建築的アプローチを検討することで、街における新たな公共性や居場所のあり方を探ることを目的とする。

**3. コーヒースタンドの建築事例調査** 建築専門誌「新建築・住宅特集」、建築専門 web サイト「tecture magazine」、「architecturephoto」に掲載されているコーヒースタンド事例のうち、用途がコーヒースタンド単独で成立しており、屋内の収容人数が30人未満<sup>1)</sup>である23事例<sup>2)</sup>を調査対象とする。

**3-1. 設計意図・設計操作の分析** 設計者の言説・建築写真の分析から人の〈行為〉に関する設計意図3種類、人の〈感情〉に関する設計意図1種類、〈地域との関係〉に関する設計意図6種類、〈空間〉に関する設計意図10種類と、それらに対応する30種類の設計操作を得ることができた(図1)。内部空間と外部空間のつながりを意図する{5内外の連続性}に設計操作が6種類、人の滞在を促す意図である{3 滞留空間}と、店舗の個性を強調する意図である{20 コンセプトの強調}に設計操作が5種類と多くみられた。次に{1 視線の誘導}、{6 景色との接続}、{9 存在感の強調}、{12 空間の開放性}、{17 外部空間の利用}、{18 光}に設計操作が3種類と多くみられ、人や外部空間との積極的な関係性や、

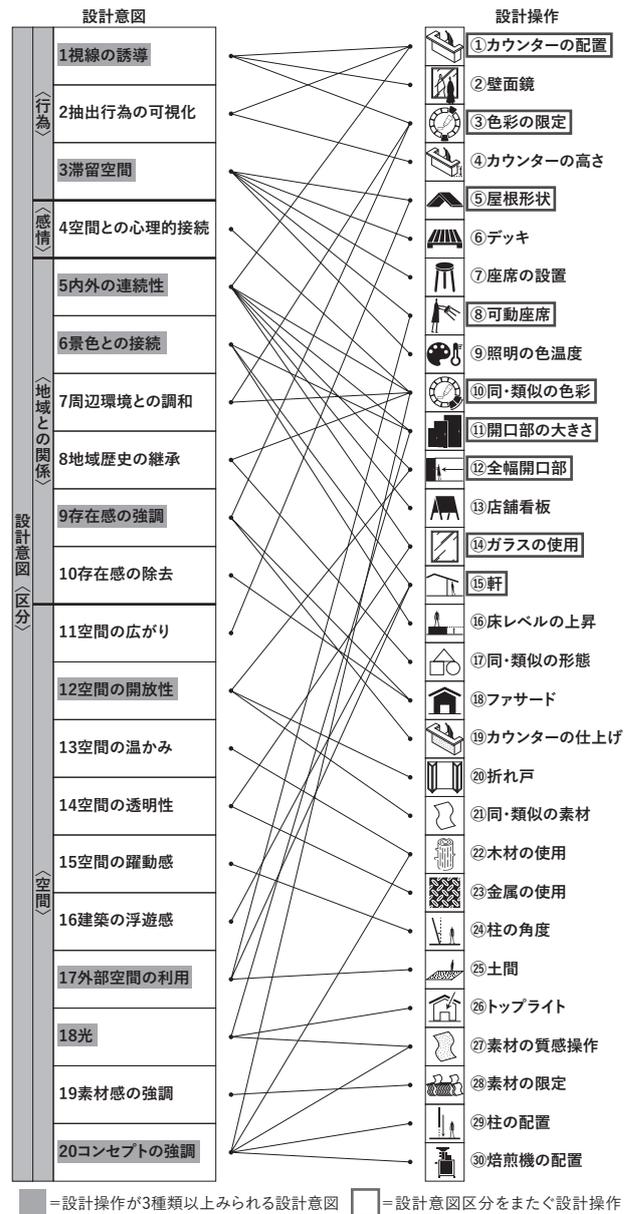


図1 設計意図と対応する設計操作

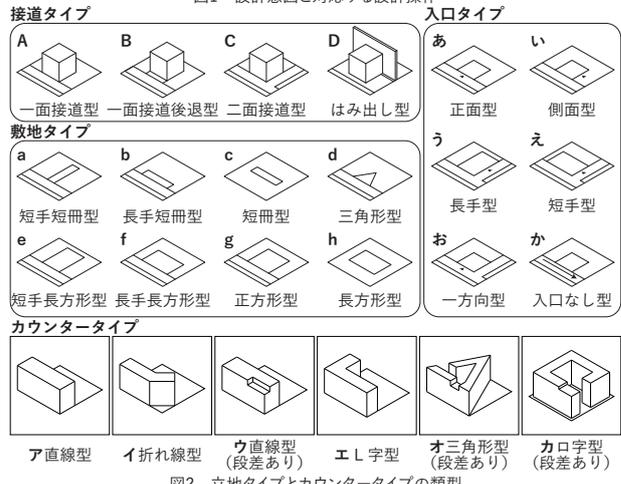


図2 立地タイプとカウンタータイプの類型

Exploring the Potential of Small-Scale Architecture in Urban Narrow and Underutilized Spaces:

A Study on the Revalorization of Urban Marginal Spaces through Coffee Stands

Takumi YATO

店舗での空間体験を重視する設計意図を読み取ることができた。また、抽出された設計操作のうち、①カウンターの配置、③色彩の限定、⑤屋根形状、⑧可動座席、⑩同・類似の色彩、⑪開口部の大きさ、⑫全幅開口部、⑭ガラスの使用、⑮軒の9種類の設計操作が複数の設計意図区分にまたいでみられ、コーヒースタンドの空間の中で果たす役割が大きいことが確認できた。

**3-2. 立地タイプ・カウンタータイプの類型化** 各事例の立地タイプ・カウンタータイプを調査し、【接道タイプ】4種類、【敷地タイプ】8種類、【入口タイプ】6種類、【カウンタータイプ】6種類の類型を得ることができた（図2）。

**3-3. 分析** 3-2.の類型と、設計操作の分析を統合したものを表1に示す。屋内に座席が無いものを「立ち寄り型」、屋内と、半屋外または屋外の両方に座席があるものを「半滞在型」、屋内のみに座席があるものを「滞在型」とした。

**3-3-1. 立ち寄り型** 「立ち寄り型」6事例のうち5事例の【入口タイプ】が『か入口なし型』であり、前面の道に対してカウンターが接している構成であった。建築面積が25㎡以下であり、屋内には店舗空間のみの構成が多く、滞在性の低い構成である一方で、設計意図【3滞留空間】が4件と、「半滞在型」、「滞在型」と比較して多くみられた。屋根形状や簡易的な座席の設えによって滞在性を最小限に調整し、街との連続性が高められ、短時間利用を前提とした開放的な関係性が形成されていると考えられる。

**3-3-2. 半滞在型** 「半滞在型」11事例のうち7事例が【B一面接道後退型】であり、建築と前面の道との間の空間を、屋外または半屋外の客席として積極的に利用していることがわかった。また、設計意図【5内外の連続性】が5件と「立ち寄り型」、「滞在型」と比較して多くみられた。建築の後退によって生じた屋外・半屋外空間を客席として積極的に利用することで、内部と外部を横断する滞在体験が成立している。【カウンタータイプ】では「立ち寄り型」と比較して、『エL字型』が11事例中6事例と増加した。『エL字型』の【カウンタータイプ】はL字の一边が前面の道に接しており、外部に対する関係をもっているものが3事例、前面の道からは後退し客空間に対して2辺接しており、客との関係性を重視しているものが3事例みられた。カウンターの配置によって街や客との関係性を選択的に操作し、中間的な滞在性を成立させている点が特徴である。

**3-3-3. 滞在型** 「滞在型」6事例では、全ての事例においてカウンターが前面の道から後退している構成であり、街との直接的な関係性は弱まり、屋内での滞在体験が重視されている。設計意図では、3種

表1 座席数/面積/立地/カウンター/設計操作の関係

事例番号	座席/面積		立地タイプ		カウンター	統合図	設計操作	型
	屋内	半屋外	屋外	接道				
4	—	—	2人	A	g	か	ア	立ち寄り型
17	—	—	3人	C	c	か	ア	
23	—	—	4人	A	d	か	イ	
9	—	—	4人	A	b	か	ア	
1	—	—	4人	C	h	う	カ	
22	—	—	8人	D	b	か	ア	
14	—	—	2人	A	f	か	ア	
16	—	—	3人	A	f	あ	ア	
8	—	—	6人	B	e	あ	エ	
18	—	—	7人	B	f	あ	エ	
21	—	—	3人	B	a	あ	ア	半滞在型
15	—	—	5人	B	e	あ	エ	
3	—	—	10人	C	h	え	エ	
13	—	—	8人	B	e	あ	ア	
10	—	—	14人	A	e	あ	エ	
6	—	—	6人	B	b	あ	ア	
2	—	—	16人	B	e	あ	エ	
11	—	—	3人	B	f	あ	ウ	
20	—	—	11人	C	g	お	エ	
12	—	—	18人	A	g	あ	オ	
19	—	—	18人	A	e	い	ア	
7	—	—	20人	A	f	あ	エ	
5	—	—	21人	A	e	あ	エ	

■ = 設計操作が3種類以上みられる設計意図 □ = 設計意図区分をまたぐ設計操作

類以上の設計操作がみられた9種類の設計意図のうち、{3 滞留空間}以外の設計意図が確認された。

**3-3-4. まとめ** 「立ち寄り型」では、前面の道と直接接続する構成によって短時間利用を前提とした開放的な関係性が生み出され、「半滞在型」では、内部と外部を横断する空間構成によって中間的な滞在性が成立している。「滞在型」では、街との距離を確保しつつ、屋内での滞在体験が重視されている。これらの結果から、コーヒースタンドは、街や外部空間との関係性を空間操作によって調整し得る建築形式であり、都市の中で人の滞在や行為を段階的に受け止める装置として機能していると考えられる。

#### 4. 都市の余白空間調査

**4-1. フィールドワーク** 那古野地区周辺を調査対象エリアとしてフィールドワークを行う。このエリアは空襲被害を免れたエリアであり、かつ戦後以降土地区画整理事業が行われていないエリアである。したがって、昔ながらの街構成と現代の都市軸が入り混じっており、都市の余白空間が多く残っている可能性が高いため調査対象エリアとした。調査の結果30件の余白空間が抽出された(図3)。

**4-2. 余白空間の類型化** 余白空間の成立条件の違いから、①建築間の狭小地、②街区と建築間の未利用地、③駐車場未成立空間、④旗竿地の4種類に類型された(図4)。

**5. 設計提案** 4-1.で抽出された4種類の余白空間から設計対象敷地を1つずつ選定し、設計提案を行う。

**SITE1** 1番目に多く抽出された①建築間の狭小地からNo.19の敷地を選定する(図5)。ここは、円頓寺商店街・四間道・美濃路の入口に近いエリアであり、観光客の通行が多いエリアである。長い奥行きを有し、人の流れを受け止めることができるこの敷地に、「滞在型」のコーヒースタンドを計画する(図9)。前面道路に対して焙煎室を配置し、コーヒースタンドとしての個性を強調する。コーヒースタンドへのアプローチからは客席とカウンターが見え、屋内空間での滞在を促す。帰りの動線を焙煎室の入口と対面させることで、焙煎室への寄り道を促し、コーヒー豆などの購入を通してコーヒースタンドでの体験を日常に持ち帰ることができる。

**SITE2** 2番目に多く抽出された②街区と建築間の未利用地からNo.6の敷地を選定する(図6)。ここは、抽出された余白空間の中で唯一大通りに面している場所となっている。歩行者の通行量が多いこの敷地に、「立ち寄り型」のコーヒースタンドを計画する(図10)。敷地形状に合わせた折れ線型のカウンターを採用し、人の流れを受け止める形状とした。北側に半屋外のカウンター席を設け、スタッフとの密な関係性も生み出す。敷地東側には歩道と連続したス

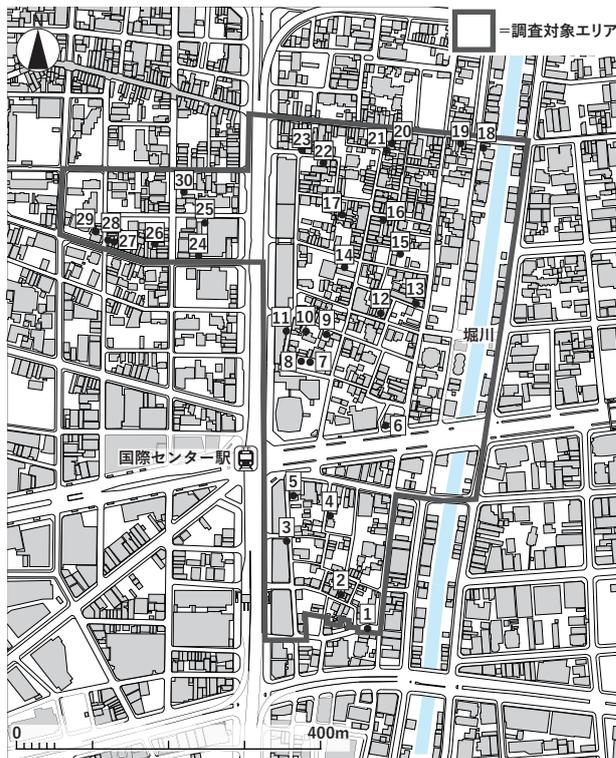


図3 余白空間プロット図

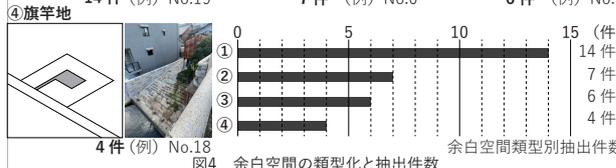
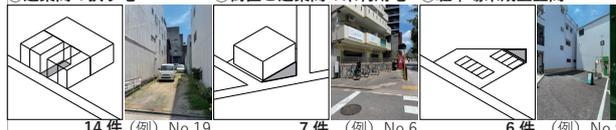


図5 SITE1敷地図

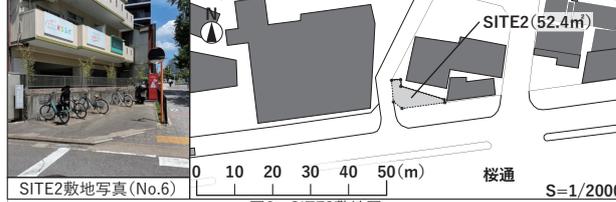


図6 SITE2敷地図



図7 SITE3敷地図



図8 SITE4敷地図

タンディング席を設け、短時間の滞在を促しながら、都市の中で一息つく場所の存在を示している。

**SITE3** 3番目に多く抽出された③駐車場未成立空間から No.9 の敷地を選定する (図7)。ここは、周辺が住宅地となっており、地域住民の通行が多いエリアである一方で、西側には商業施設、北側には那古野の地域に根付いた飲食店や商業施設が建ち並んでおり、観光客の通行もみられるエリアである。コインパーキングの存在によって前面道路から後退したこの敷地に「半滞在型」のコーヒースタンドを計画する (図11)。HP シェルによる曲面の屋根を採用し、動きのある立面がコインパーキング越しにも存在感を出す。駐車されていない時のパーキングスペースはコーヒースタンドの屋外空間にもなりえる。既存の車止めポールを簡易ベンチのように利用することで、客の行為が前面に滲み出る。

**SITE4** 抽出件数が最も少ない④旗竿地からは No.18 の敷地を選定する (図8)。ここは、美濃路と堀川に面した那古野地区としての特徴が強い場所で

ある。那古野の特徴である路地性を活かした、「半滞在型」のコーヒースタンドを計画する (図12)。美濃路からは堀川の水面に向かって進むアプローチを設け、奥への期待感を演出する。一方堀川にかかる五條橋からは、川に対して大きく開いたコーヒースタンドが見え、その存在を街に対して大きく示している。客席は屋内に加え軒下に半屋外客席を設け、川や街と繋がる滞在体験を得ることができる。

**6. 結論と展望** 本研究では、コーヒースタンドの空間構成に着目し、都市に残された余白空間を建築的に再編する可能性を示した。建築事例の分析から、滞在性はカウンター配置や前面道路との関係、屋外・半屋外空間の取り込み方などの空間操作によって段階的に形成されることが確認された。設計提案では、敷地条件や周辺環境に応じて滞在性の異なるコーヒースタンドを計画し、小規模建築によって人の行為や居場所、街との関係性を生み出す手法を提示した。今後の都市・建築計画における小規模建築の可能性を広げる一助となることを期待したい。

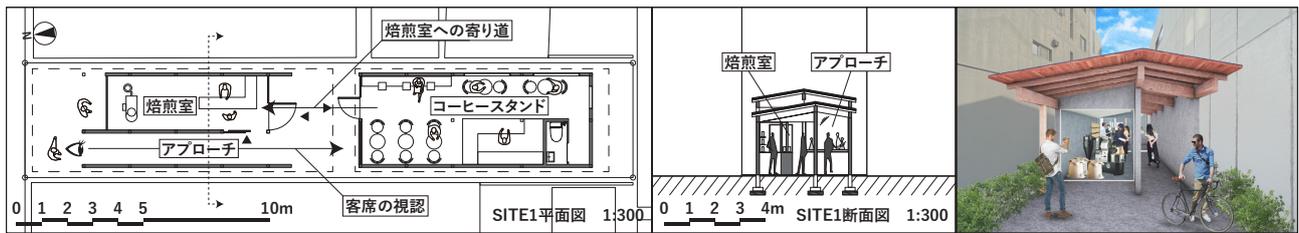


図9 SITE1設計提案「滞在型」

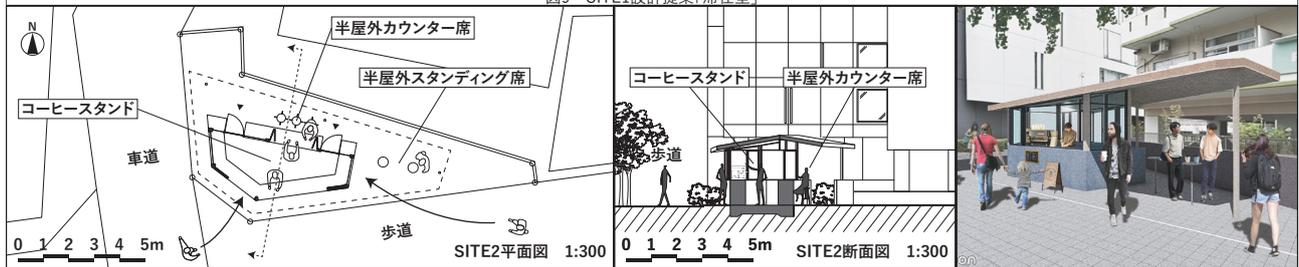


図10 SITE2設計提案「立ち寄り型」

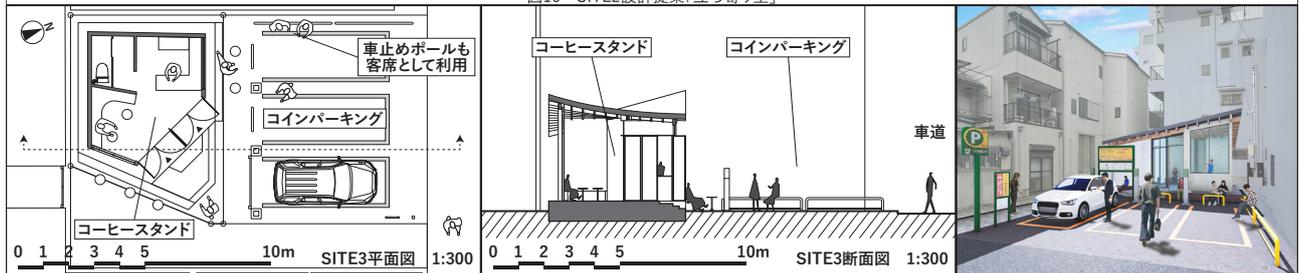


図11 SITE3設計提案「半滞在型」

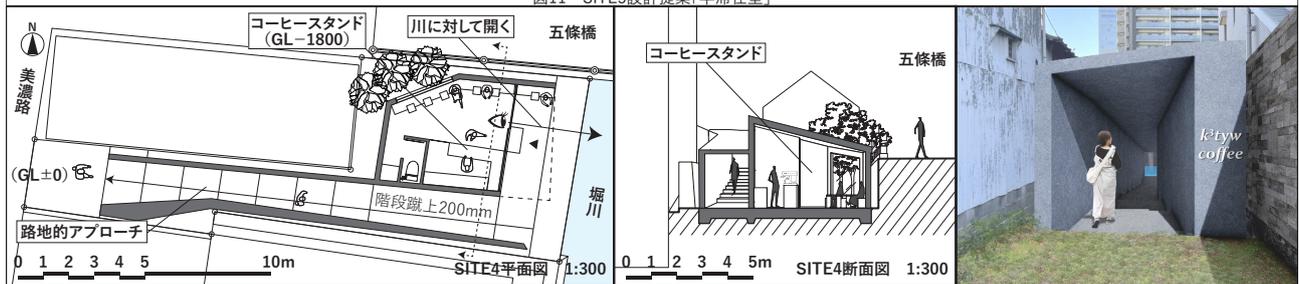


図12 SITE4設計提案「半滞在型」

【注釈】1) 収容人数が30人以上となる場合、防火管理者の資格取得が必要となる。これはコーヒースタンドを開業するにあたっての最小条件を超える要件であるため、本研究では調査対象外とする。2) 抽出した既存コーヒースタンド23事例は本論参照。

【参考文献】1) 『名古屋戦災復興誌』名古屋都市計画局 2) 『名古屋都市MAP』新創社 3) 『中部の都市を探る』中部都市学会